

『中世思想研究』の還暦によせて

川 添 信 介

『中世思想研究』は第1号が1958年に刊行されてから本号で還暦を迎えることとなった。本学会が厳しい財政状況をかかえた時期もあったなかで、途切れることのない刊行のためにこれまで尽力してこられた会員諸氏とともに、まずはこの慶事を喜ぶたい。

中世哲学会の1952年発足と本誌刊行の経緯などについては、第1号の「発刊に際して」、第23号の「中世哲学会の今昔」、そして第34号の「中世哲学会創立四十周年にあたって」といった当時の委員長（現在の会長）の先生方の寄稿によって、さらには本誌発刊以前に出された『中世哲学会会報』（4冊）において創設期の熱気に満ちた雰囲気を知ることができる。1982年に会員となった私には学会の歴史を十分に語る資格はないので、『会報』と『中世思想研究』の既刊全体を通覧して、いくらか思うところを記しておくこととしたい。

第59号までの『中世思想研究』には、「論文」と「研究ノート」（第42号からは「研究論文」）、また「特別寄稿」や「特別講演」といった学術論文が465篇収載されているが、最初に目につくのは論じられている思想家の一貫した「偏り」である。複数の思想家を扱った論文もそれなりの数になるので正確な数値ではないが、アウグスティヌス関係が100篇ほど（21パーセント）、トマス・アクィナス関係が約160篇（34パーセント）となり、合わせると半数を超えている。中世哲学研究は歴史的な探求というだけでなく哲学的営為そのものでもあるという観点からは、この統計的数字はアウグスティヌスとトマスの哲学が現在でも参照すべき重要な価値を有していることを証していると言えるであろう。しかし、正確な比較は不可能であるとしても、欧米の中世哲学に関する

「総合的」な学術雑誌ではこの2人がこれほどのシェアを占めることはないのではないかと思われる。また、この60年間を20年ごとに区切って眺めてみると、アウグスティヌスについては全論文中に占める割合がそれぞれ30, 20, 12パーセントと、トマスについては36, 34, 30パーセントと減少していることが確認できる。以上のことを考えると、第二次世界大戦後に西洋をあらためて根底から学び直そうとした我が国において、中世哲学研究を志した人々がこの2人の偉大な仕事に依拠しながら研究を始めざるをえなかったことを示していると言ってよいであろう。

とはいえ、上に掲げた数値は裏側から言えば、『中世思想研究』で論じられる対象がより多様になってきたことも明確に示している。いくつかの例を挙げるならば、新プラトン主義者やギリシア教父、12世紀の諸思想家、さらにトマス以外の13~14世紀のスコラ哲学者たちに関わる研究は明らかに増えてきている。また、イスラムやユダヤの思想家に関わる研究は初期からそれなりの割合を占めていたとはいえ、近年の増加傾向は明確である。クザーヌスが一貫した関心を持たれてきたのに対して、近世のいわゆる「第二スコラ」の研究については最近になって関心の高さが現れている。『中世思想研究』の歴史が示している研究対象の拡がり、我が国の中世哲学研究が「成熟しつつある」ことを示している。

だが他方では、『中世思想研究』の60年間を通じて、その重要性に比して研究が手薄な領域が確認できることも確かである。アウグスティヌス以外のラテン教父、ボエティウス、アンセルムス、アベラールなどの研究は充実しているとは言えないであろう。この状況が本誌だけのことであれば幸いであるが、やはり我が国の中世哲学・思想研究の「偏り」の一端を反映しているのではないかと思われる。学界全体としては考えてみるべきことであろうと思う。

さて、上記のような研究対象の変化は、海外の研究動向の反映という面が一方にあるだろう。しかし、近年になって中世哲学や広く中世思想に関する定期刊行物の種類が増えたり、モノグラフィーとして出版できる環境が充実したことによって、会員諸氏が研究成果発表の場を本誌以外に持つようになったという要因も大きな影響を与えていると思われる。

初期とはちがい現在では、本誌だけが日本の中世哲学研究の全体を覆っていると言うことはできなくなっているのである。このことは、喜ぶべきことであるのは確かであるが、他方では「我が国の中世哲学研究において『中世思想研究』はどのような地位あるいは特徴を持っているのか、あるいは持つべきなのか」という問いが投げかけられているということでもある。

この課題に対して、われわれは第52号（2010年）から「特集」を掲載することによって応えようとしてきたと言えるであろう。中世哲学会がその創設期からシンポジウムを重視してきたことは、『会報』2号にすでにその記録が現れることや本誌が第16号（1974年）以来シンポジウム報告を掲載し続けてきたこと（第50号を除く）に現れている。しかし、2009年大会のシンポジウム開催とその記録を第52号に「特集」として掲載したことは、一つの画期となった。当時の中川純男会長のリーダーシップのもと、それまでのシンポジウムのあり方が刷新された。テーマ設定や提題者・特別報告者の選定などを担う3、4人の企画委員が選定され、このチームが相当の時間と労力を払ってシンポジウムの責任を負うこととされたのである。この新たなプロジェクトの大きな特徴は、比較的若い研究者に企画委員をお願いしていることに現れているように、シンポジウムを提題者の「既に来上がった」研究内容を照らし合わせる場とするというよりは、開催に至るまでの企画の過程を重視するという点にある。若手研究者のキャリアにとってそれまで未知の研究主題であっても、シンポジウムのために新たな研究を始めることを促す機会となることが意図されてきたのである。その結果、2009年以降ストア派、プラトニズム、自由学芸、神秘主義、原罪論といったテーマのもと、充実した内容のシンポジウムが開催され、その成果は翌年刊行の本誌の「特集」として掲載された。そしてこの「特集」は中世哲学会としての関心の在り処を世に示すこととなっていると言えるであろう。

人文学の研究は、最終的には研究者一人ひとりの孤独な作業の結果として発表されざるをえないものである。学会発表や本誌での論文の公刊は、個々の研究成果を共通の関心を持つ仲間と共有するとともに、仲間の批判によって自らの研究を深めようとするものである。本会・本誌がこのような役割を核とすることは止めることはないであろう。しかし、

2009 年から始まった新しいシンポジウムと「特集」は、個々の研究者の自発性に基づく研究とその発表・批判の場としての学会という従来のあり方を超えて、「共同研究」の場ともなることに向けて歩みだしたのである。そしてこのことは、個別の専門に特化された学会や雑誌とは異なっており、中世哲学・思想の「総合的で包括的な」学会である中世哲学会と『中世思想研究』の存在意義を明確にしようとする一つの試みであったと言えるであろう。この試みは今後も継続してゆく価値のあるものだと私は考えている。学会がより強固なコミュニティとなることによって、1 プラス 1 が 2 ではなく 3 にも 4 にもなる成果を目指すことに積極的であることは当然のことだと思うからである。

最後に、本誌の 60 年の歩みとともにあった先達と会員諸氏に対して、また、創文社の時代からずっと本誌を支えてくださった知泉書館の小山光夫社長に、あらためて敬意と感謝を捧げたい。そして、二度目の還暦を遠望しつつ、日本の西洋中世哲学研究のさらなる発展のために、いっそうのご協力とご支援をお願いする次第である。